

主 論 文 要 旨

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	清藤 春香
<p>主 論 文 題 名 :</p> <p>グローバル化と発達障害—発達障害があるニューカマー・帰国子女の事例から—</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本研究の目的は、外国人や障害者への差別、日本の文化的価値観に同調するよう求める圧力等がみられる日本社会において、成人した「発達障害があるニューカマー第二世代・帰国子女」がどのような状況に置かれているのかを明らかにすることである。</p> <p>現在、戦後に来日した外国人であるニューカマーの子どもと「発達障害」については、教育、医療、福祉等の支援現場において、注目が集まりつつある。しかしながら、「発達障害」と診断されたニューカマー第二世代のうち、成人し就労した当事者自身の声は、管見の限りではほとんど明らかになっていなかった。加えて「発達障害があるニューカマー第二世代」の研究からは、ニューカマー児童が学校等でコミュニケーション上のトラブルを起こした際、それが言語・文化的背景が原因か、それとも「発達障害」によるものか、実際に軽度の「発達障害」があると思われるケースであっても、非常に診断しにくいことが報告されている(阿部 2008)。これは「発達障害がある帰国子女」においても、発話の遅れがバイリンガル環境で育ったためと判断され、「発達障害」への適切な支援が遅れたとの事例が報告されている(田宮ほか 2016)。しかしそのように、ニューカマー第二世代と同様の障壁に直面しうる「発達障害がある帰国子女」についても、十分焦点が当てられてこなかった。このことは、現在特別支援学級に在籍しているニューカマーや帰国子女の生徒達が、成人し学校を卒業して就労した時、レイシズムや障害者差別、同調圧力が存在する日本社会の中で、どのような困難を経験しうるのか、それに対しどのようなコミュニティが当事者に対し、安心して立場性を明らかにできる居場所を提供しうるのか、不透明であることを意味する。そこで以下の3つの問いを設定した。</p> <p>①成人した「発達障害があるニューカマー第二世代」は、自身の外国のルーツと発達上の特性をどのように捉えているのか</p> <p>②成人した「発達障害がある帰国子女」も、複数の言語・文化的背景と発達上の特性を持つことで、困難に直面している可能性があるのではないか</p> <p>③成人した「発達障害があるニューカマー・帰国子女」が感情的なサポート等を必要とした時、一つのカテゴリを素地とするコミュニティはどのように寄与しうるのか</p>			

これらの問いを明らかにするために、成人した「発達障害があるニューカマー第二世代・帰国子女」を中心とした調査協力者 19 名に、ライフストーリー・インタビューを実施した。そしてその結果を、スティグマ、交差性、信頼の範囲の分析枠組みから考察した。分析枠組みの概要を簡潔に説明すると、スティグマとは、個人の特徴や属性が差別を受ける原因と化すことを示した概念である(Goffman 1963=2003)。交差性とは、複数のアイデンティティがあることで、社会から一層排除される側面を示した分析枠組みである(Crenshaw 1989 等)。そして信頼の範囲とは、集団が相互扶助の規範を適用させる範囲を指す概念であり、集団外部にも相互に助け合う規範を適用させるコミュニティは正の外部性を、集団内部でのみ扶助を行い、集団外への不信によって内部の連帯を高めるコミュニティは負の外部性を示す(Fukuyama 2001)。

本文では、序章で上記に挙げた問題の背景と所在、本研究の意義と用語の整理、研究方法を提示した後、第 1 章で研究の背景と先行研究の動向、問い、分析枠組みを示した。調査結果は、下記に示す第 2 章から第 4 章に記載した。以下、2 章以降の概要を述べる。

第 2 章では、成人した「発達障害があるニューカマー第二世代」が、外国のルーツと発達上の特性をどのように認識しているのかについての語りを考察した。当事者達は、職場や教育機関において、外国のルーツや発達上の特性について、十分な理解を得ているとは言い難い例が報告された。また外国のルーツがあると一目で分かりやすい例では、「ハーフ」への「外国語が話せる」「容姿が良い」等のステレオタイプを向けられることと、「発達障害」があることが絡み合った生きづらさを感じている例が見られた。その一方で、外国のルーツの可視性が比較的低い当事者にも、強い同化圧力にさらされ独りで困難を抱え込む等の例が見られた。その中で、音への過敏さが原因で明確に学業への支障が発生し、自ら病院を受診したにもかかわらず、外国出身の両親が出身国の文化的背景と社会的文脈の中で、「発達障害」をスティグマと捉えたことから、通院を強く反対され、当事者が治療を断念した例があったことは留意されたい。

第 3 章では、成人した「発達障害がある帰国子女」の経験を考察した。帰国子女については、かつては教育上の支援がないまま放置されていたものの、現在は大学入試における特別枠等の制度的な対応がとられるようになった。このことから、実情に反して、既に問題は解消されたとの印象が広がりつつあると言われている(岡村 2017)。しかし本研究からは、帰国子女であることと「発達障害」であることは相互に絡み合い、「発達障害がある帰国子女」としての生きづらさをもたらすことが確認された。規範を遵守する「日本人」の同級生達と、海外で他の社会規範や価値観があることを知っているがゆえに、必ずしも校内の規則や価値観に一律に迎合しない当事者との間に、価値観のずれが起きていた。そしてその乖離は、本人曰く ASD の特性であるコミュニケーションの

主 論 文 要 旨

No.

苦手さや「過敏さ」等が一因でもある。ただし中には、発達上の特性による困難が、帰国子女であることである程度軽減される様子もみられた。

第4章では、「発達障害があるニューカマー第二世代・帰国子女」に対し、エスニックコミュニティや「発達障害」の当事者会等、一つのカテゴリに基づくコミュニティの構成員が正の外部性を示し、当事者の外国とのつながりと「発達障害」の両方に理解を示した上で、感情的なサポートを行う等の社会関係資本を提供しているかを検討した。調査の結果、現段階では必ずしも直接社会関係資本を提供してはいないエスニックコミュニティも、世代交代や情報提供によって「発達障害」への認識が変わっていけば、今後当事者への社会関係資本の提供にもつながりうることを確認された。また当事者会とは銘打っていないものの、事実上「発達障害」者が多いコミュニティからは、当事者が「発達障害がある帰国子女」同士のつながりを得ている例が見られた。4章の結果はインターセクショナルな立場性がある人々に対し、既存の一つの社会的カテゴリに基づくコミュニティとの連携が有効である可能性を示唆している。

終章では各章の結果が、特に交差性の理論や実践に対し貢献したこと、「発達障害があるニューカマー第二世代・帰国子女」同士がつながり、ネットワークを形成できる機会を創設する必要性が示唆されること等を提示した。ただし本研究の限界として、調査対象に該当する協力者を見つけるのが困難であったことから協力者の人数が少なく、今後より多くのケースを検討する必要があることも示した。

本研究全体の調査結果について、特に「発達障害」であることと、「ニューカマー第二世代」または「帰国子女」であることは、レイシズムや障害者差別、日本社会の同調圧力が絡み合った、複雑な生きづらさをもたらすことは留意されたい。当事者はそれに対し、様々な戦略を駆使して対抗している。しかしそうした方策は、時に当事者が心理的な負担を感じるものでもある。ニューカマー第二世代のみならず、しばしば「肯定的」にも捉えられるカテゴリである「ハーフ」や「帰国子女」であっても、それが「発達障害」と交差することで、当事者に新たな困難をもたらすことがある。そうした交差による影響を十分に理解し、その解決に向けて対策を検討すべきである。

【参考文献】

- 阿部裕, 2008, 「在日外国人・児童生徒の精神科的諸問題と多文化的支援」『シリーズ多言語・多文化共生実践研究』2: 102-110.
- Crenshaw, K. W., 1989, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex," *University of Chicago Legal Forum*, 140: 139-67.
- Fukuyama, F., 2001, "Social capital, civil society and development," *Third World Quarterly*, 22: 7-20.
- Goffman, E., 1963, *Stigma*, New York: Simon and Schuster. (=石黒毅訳, 2003, 『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.)
- 岡村郁子, 2017, 『異文化間を移動する子どもたち』明石書店.
- 田宮聡・岡田由香・小寺澤敬子, 2016, 「バイリンガル環境と言語発達評価」『児童青年精神医学とその近接領域』57(3): 450-7.